

神戸国際支縁機構
会長 岩村義雄

参加者総勢7名, 岩村義雄, 村上裕隆, 本田寿久, 大島健二郎, 藤丸秀浄, 片山忠明, 村上安世
<https://youtu.be/uQ91STZrN7M>

(1) 最大の避難場所 杷木中学校体育館

a. 7月16日(日)2台で出発

一行は、午前4時に朝倉市杷木(はき)中学校体育館に集合。2台が大鍋, プロパンガス, 食材などを福岡県朝倉市杷木(はき)中学校へ搬入。神戸国際支縁機構の炊事にとりかかりました。ボランティアは7名です。

杷木町は日本一の甘柿の生産地です。「志波柿」(しわがき)という名で全国的にも知れ渡っています。第1次の時は、熊本からの大島健二郎(第63次,熊本地震)君を迎えるために福岡県筑紫野市から大分県日田市に走っている国道386号沿いはドロで埋まっていました。2次では、原鶴温泉付近はアスファルト地が見えるようになっていました。九州自動車道や386号が走られるが、被害が復旧したと早計には言えません。車窓からの朝倉市の光景は茶色くなった水田, 壊れたグリーンハウス, 積み上げられたスギ, 被災の大きさが各所に見られました。

画像

b. 炊き出し

校舎と体育館を結ぶ通路近くの駐車場に、大鍋類, プロパンガス, 食材を降ろしました。未明午前5時から朝食に向けて、炊き出し開始します。けんちん汁約200食にかかります。避難所にいる方たちは、阪神・淡路大震災の時に幼かった機構のメンバーたちが恩返しに来ているというわさが広がっているせいか、被災者のみなさんが快く、明るく、感謝の気持ちで接してくださいます。

朝食ができる頃、白水克美校長(58歳)は、教師達と被災者にどのように必要な配慮をすべきか、会議をし、打ち合わせた内容を迅速に移そうとなさっています。

体育館では小島重美さん(69歳)と再会します。小島さんは杷木白木谷(しらきだに)255-1に2階建ての家に住んでおられました。白木谷の集落は30戸ほどでした。残ったのは2,3件だそうです。以前は建築の左官の仕事をしておられました。今年1月咽頭癌から回復したものの、とつぜんの土砂崩れに遭遇されました。2階におられましたが、奥さまの初子さんは1階でペットの世話をしておられました。捨て犬を飼っておられたのです。警報もなく心の準備ができていない中、奥さまは濁流に吞まれ、1キロメートル先まで流されたとのこと。1日半後、遺体が発見されました。東日本大震災の時もそうでしたが、津波の水害で死亡した場合、ご遺体の損傷は大きく、男女の性別がわからないほどです。衣類もなくなり、手足もまともに残っておらず、眉毛などすべての体毛はなくなっていました。直径50センチ, 長さ10メートルもあるスギも枝はなく、樹皮ははがれています。土砂とともに流れる間にぶつかり合うのです。したがっ

て、遺体安置所に配偶者や家族が一目会いたいと願っても、警察は承認しません。小島さんも DNA で本人だと判明しても、死体を見ることも許されませんでした。「会わせて欲しかったけど、あきらめにやならんとば」と寂しそうに語られました。茶毘に付して、骨になってからの対面という具合でした。助かった夫小島さん自身も逃げ場もなく、手足を負傷しておられました。炊事など家事は一切奥さま任せだったので、避難所を出て行かざるを得なくなったらどうしたらよいか、不安そうな表情でした。「ゴン太は行くとか、ないとですよ」とどろどろになった犬を杷木中体育館に連れて来ておられます。テレビの報道で知った東京の女性から体育館宛に手紙と品が来ているのをうれしそうに筆者に見せてくださいました。

画像

c. 現場の混乱

朝食はおにぎりの到着が遅れ、8時半でした。平素早く朝食を食べる習慣がある人たちが多く、待ちきれない様子です。

機構は被災者に一番近いテーブルに、神戸から運んだ容器にサランラップをおいて、提供します。久保山淳子さんの3人の娘さんたちがボランティアを手伝ってくれます。智畝(ちほ 19才)さん、リ畝(りほ 小5)さん、志畝(しほ 小3)さんです。久保山さんは神戸市須磨区の友が丘小学校、啓明女学院出身です。高校時代は7種目の陸上競技に打ち込んでおられました。寒水の3階建ての市営の1階が完全に埋もれた号棟に住まわれた母子家庭は大変です。阪神・淡路大震災を西宮で被災し、今度は、嫁いだご主人の田舎の朝倉市で被災されました。無情です。「神・仏はいるのか」と思わず口から出てしまう試練です。3人の娘さんたちは被災者に配給し終えてから、4人が寝起きしされている布団を畳んでできた約1平方メートルほどのスペースで食をとりました。

画像

(2) 山津波と呼ばれる土石流

a. 人災

朝食後、伊藤千恵さん(81歳)という女性に傾聴ボランティアをさせていただきました。品性のある方で、聡明です。幼い時から農をされ、4,5歳から田植え、稲刈りを手伝ってこられたにもかかわらず、背筋がまっすぐです。住まいは寒水(そうず)地区です。寒水は隣の佐賀県では「しょうず」と発音します。

伊藤さんの娘さん裕子さん(49歳)が温かいけんちん汁のお礼を言われた際、「震災ではいかがでしたか」と尋ねると、母がしっかりしていて正確に説明できるからと、後で来てくださとおっしゃったことがきっかけで、千恵さんから色々なお話を聞くことができました。寒水の15,16戸は流され、古賀さんは亡くなられ、古川さんはいまだ見つかっていないと言われました。数字など正確に覚えておられるのは、幼い時からそろばんの影響で暗算が得意だったこと、浮羽郵便局の簡易保険組合の事務局長をしたこと、地域の有力者達との交友をされていた経歴などからうかがい知ることができました。信頼を勝ち得てこられた人柄が伝わってきました。

画像

伊藤さんは今までにない悲惨な豪雨の顛末について、語り始められました。「大きなスギが、すごい音を出して濁流と共に降ってきたのよ」と。どうしてそうなったのかをしっかりと口調で話されます。山のスギが外材で売れなくなって、放置されたままになった山林。枝打ち、間伐もしないで、日があたらなくなってしまった地面に何も育ちません。斜面を削って日本一の柿の生産地になったものの、大地に雨の水はしみ込みません。根の浅い果実の木々が山崩れを助長しました。自然を大切にしなくなったから、全国どこでも起こり得る人災、と語る言葉は重みがありました。

b. 宗教施設

昼食前、朝倉市の寺社仏閣の被害を避難者に尋ねました。お寺の損傷について知っている人はいませんでした。浄土真宗の西宗寺(さいしゅうじ)を訪ねるようにすすめられました。15ヶ寺の情報について聞けるのではと教えられたからです。久喜宮(くぐみや)小学校近くにあります。7月6日に朝倉市から避難所情報を聞いた時には、久喜宮小学校の40人の避難者にも炊き出しができればという案もありました。久喜宮小学校、光陽高校の避難者はサンライズに移動されたり、統合が図られたようです。

近道をと、狭い農道をハイエースで走っていると迷路のようなところに入り込んでしまいました。家が泥をかぶって、洗浄作業をしている農家の方が暑い中、顔に汗が流れ落ちるのをタオルでぬぐいもせず、道を親切に教えてくださいました。笑われると目が細くなってえびす顔の方でした。ちゃんと行けるかどうか、ずっと見守り、曲がり角にたどり着くと、遠いにもかかわらず、合図をして無事に行けるかどうか、30歳前後なのに親のように気遣うおやさしい方でした。

おかげで3つの大きな寺が並ぶ場所の駐車場に停めて、境内に入りました。するとこれから葬儀があるからというにもかかわらず、「あがんなさい」と藤玄洋住職は庫裡(くり 住職の住居)でもある会館に招き入れてくださり、坊守(ぼうもり 住職の奥さま)である宏子夫人がにこやかに茶菓を振る舞ってくださいました。忙しい時間帯なのに丁寧なもてなしに恐縮してしまいます。住職も「だいじょうぶだから、まあそうあわてずに……」、と微塵も多忙さを感じさせない懐の広さです。「避難所で本願寺のタオルを拝見しました。迅速なご配慮ですね。みなさん喜んでおられました」と申し上げると、1000本を配ったと言われました。地域としては、「東本願寺系統がゼロと神戸で聞いたのですが、お西さんはどこも被害はなかったのですか」と尋ねると、どのお寺も大きな被害はなかったと言われました。筑後川を境にして、手前が黒田官兵衛の流れの黒田藩、川より向こうが有馬藩で、すべて東本願寺ですと説明されました。「兵庫県と縁がありますね」と申しました。川の向こうとこちら側で浄土真宗は東と西にきれいに分かれている日本でも珍しい地域だそうです。朝倉では、住職とは言わず、「ご院家さま(ごいんげさま)」ということも、訪問してきた葬儀の家族の方と藤住職とのやりとりで知りました。宮城県石巻市渡波では、東北弁のイントネーションで「おっさん」というのが三代目のローマ・カトリック教会信者の家庭で育ったため、何のことかさっぱりわからなかったのを思い出しました。「おっさん」とは「和尚さん」の略だったのです。宗派によって、住職についていろいろな親しみを込めた呼び方があるのは新発見でした。機構の東北ボランティアに同行される藤丸秀浄(法専寺)住職には、いつも住職と呼びかけているので新鮮な響きがありました。西宗寺から杷木中体育館に戻り、藤丸住職にそのことを話すとき、兵庫県加西市あたりでは、「ごえんさん」と言う聞き、またびっくりしました。

c. 寒水の被害

昼食を提供し、片付けた後、ボランティアメンバー6人で伊藤さんたちが住んでいた寒水に行くことにし

ます。道路は川となっているため、松末と異なり、メディア関係者もほとんど足を踏み入っていない地域です。杷木中学校から全車通行禁止の看板の横を通り抜け、向かいます。みなさん、長靴をはいています。杷木中の身近でこんなに豪雨の爪痕がひどいことはだれも想像もできないほど、家という家はたたき付けられています。本来の道が川になっています。これが道路だったとは説明がなければだれもわからないほどです。寒水に住んでいた人たちが戻って家の片付けをしておられました。本田寿久事務局長は自分の家に戻ろうにも戻れない女性の重いカバンを携えて、寒水のご自宅まで送り届けました。地図を見ても、ご本人も場所がわからないで途方にくれておられたのです。歩くだけでも汗びっしょりになるのに、カバンをもってあげる親切には感心します。地図を見ても、ご本人も場所がわからないで途方にくれておられたのです。

天井ぐらまで土砂で埋まっています。車輛も転倒していたり、土砂で餡のようにへし曲げられ、上半分しか地表に出ていません。車の原形が残っていないのです。

川になっている道を長靴で 2.7 キロほど行くと、文字社(もんじしゃ)と親しまれてきた神社があったとおぼしき場所に来ました。今回の九州北部豪雨で唯一完全崩壊した宗教施設です。官司も、人影もありませんでした。梶原明彦官司が兼務されている約 100 メートル下にある天満宮は無事でした。被災者に寛大に無料で入浴できるようにされている筑後川温泉で、どちらからともなく話しかけた方が梶原官司でした。明日から別の場所で住まうので、会える機会があったのも偶然とは思いませんでした。初めてお出合いする方ともすぐに家族のように親しくなり、お互いに「7月5日の時、どうでしたか」、「家は流されてしまってねえー」、「仕事場もなくなってよー」などと話し合える関係が福岡県朝倉市杷木(はき)にはあります。東日本大震災直後にも身分、収入、社会的立場がどうであれ、わだかまりなく家族のように話し合えるユートピアがありました。

(3) ボランティア 7月18日(火)

a. ボランティアの受け入れ

朝倉の朝食におにぎりが届きます。お腹を空かせた避難者は午前8時過ぎでも待たねばなりません。7月7日の昼食はまったく来なかったり、数が予定の3倍になったり、情報が錯綜しています。地域の防災士の活躍があつてはじめて避難所は動いています。色々な避難者の生活に必要な事柄、支縁物資、郵便など臨機応変に対応するには、経験豊かな防災士は際立った働きです。しかし、朝倉市役所の2交替で出向く担当者は引き継ぎがなされておらず、ハプニングが続出していました。防災士の度重なる願いも聞き入れてもらえません。そこで、責任がもてないと防災士は撤退してしまいました。その後、機構は第2次の炊き出しをします。防災士がいない現場では、杷木中学校の先生方も、忍耐強く被災者に仕えています。行政側の対応にいらだちを覚えておられました。問題に対して、機敏さ、臨機応変の対応ができないなどの理由で、今度は学校側が辞退したいと願い出る有り様です。

困っている人に寄り添う姿勢こそが被災地では何よりも優先されるべき精神態度です。数字、マニュアル、机の上の計画では、家族、家、仕事を失った人たちの怒り、苦しみ、くやしさを測ることはできません。みんなで助け合うコミュニティ、震災後、家族のような血の通った社会、過疎、高齢化、少子化から若者たちが地域に残る日本人の原風景を取り戻す好機到来です。そんな時、元の木阿弥の制度化されたシステムが幅をきかせる原因が何かについてわかるようになりました。阪神・淡路大震災から22年間、現場で汗を流してきてようやく発題することができます。災害ボランティアを受け入れる組織は民間

にすべきです。集中豪雨、土砂崩れ、地震、津波が今後も頻繁に起こることを考慮すると、災害知識、人的交渉能力、賢明な認知判断ができる災害体験者が適切です。現在、ボラセン(ボランティアセンターの略)、社会福祉協議会、市役所福祉課に申請し、許可されないとボランティアできない制度が被災地で定着しています。上意下達です。善意のボランティアは単なる駒にすぎません。食事の数、衛生、市政の方針が徹底されています。役所が権限をもちすぎて、介入しすぎることが問題です。盗難、食中毒、暴動など二次災害を防ぐということは、それなりの意味があるでしょう。しかし、民間の方が人間味、親切、適切な決断ができると思います。効率、能率、管理する事細かな方針が上から下へ徹底することは有害無益です。そんな高圧的な態度より、むしろ、被災者に 24 時間、寄り添うことの方がロボット、機械的、事務的でなくなります。そもそもボランティアとは上から万事すべてを命令されてするものではありません。公務員は公僕として本来の立場を認識すべきです。

ゲリラのように国の内外の被災地を訪問し、活動してきた者から見れば、お役人は何もできないのに、何でもできると錯覚しているとしか思えない言動をされるように映ります。防災士の方たちも、市役所から出向して現場で命令調に指図する方たちには、その尊大さに怒り、尊大なことに怒り心頭に達しておられました。

b. 統合の弊害

2006 年 3 月 20 日、朝倉市は旧甘木市、旧朝倉町、旧杷木町の三つが合併しました。人口は、57,488 人(2011 年)です。そうした合併により自然災害が起こることを想定しないでなされた弊害が生じています。災害がないならば、統合することによって、行政事務の効率化が図られるという大義名分によって為政者にとり好都合です。しかし、統合は緊急事態に馬脚を現します。

杷木中学校への弁当、洗濯機不足、冷房設備の遅延など、災害本部がある市役所と杷木中学校は高速道路で言えば、二つのインターチェンジもの隔たりがあります。市の中心部である甘木に本庁があり、杷木町との生活レベルの格差がありすぎます。ライフラインが途絶えたのは杷木町などきめ細かいサービスが手薄だったところ。松末、赤谷、寒水など住民の声のパイプラインがない山間部に被害が大きかったことは不幸です。行政も現地に精通しておらず、地域審議会も無視されている印象が目に付きました。

合併とか、小学校の統合は伝統的なそれぞれの地域の息づかいを抹消してしまいます。江戸時代は寺を中心に教育、戸籍、つながりがありました。明治維新以降は小学校が地域の特色、個性、伝統の中心になってきました。古里への求心力の機能がありました。近年、文科省は小中高一貫教育を奨励し、優秀な学業を達成する競争を是認するように働きかけます。マネーゲームに勝ち残る企業戦士を幼い時から育て、勝ち組をもってグローバル化に備えるのです。その結果、統合による廃校が各地で増えています。

ここ杷木においても四校が合併し、杷木小学校になります。杷木小学校、松末小学校、久喜宮小学校、志波小学校が杷木小学校になります。全校生徒 85 人の少子化に備えると住民は言い聞かされていますが、むしろかえって過疎、高齢化、少子化につながるという長期的な視点を発題する声はかき消されています。能率が優先されるという至上命題で押し切られているようです。

お祭りの時に御神輿をかつぐ若者がいない、郷土にかえっても娯楽施設がない、アクセスが不便だなどの理由から、地元の小学校を廃校にしてはいけません。帰るふるさとの思い出を抹消してはならないのです。子どもの時の群れて遊んだ友、運動会、プールなどの追憶を結び合わせる「縁」を大切にす

ことが「教育」の「育」につながります。教育とは単に教えるだけではないのです。生徒の良い資質を引き出すエデュカティオ(ラテン語 エデュケーションの語源)の原点があるべきです。苗床、ふるさとをつくる働きが小学校です。いわば心の「祖国」と言い換えてもよいと筆者は考えます。たとえ人数が少なくても、経済性の視座から廃校にするのはもってのほかです。

今回、大きな被害を受けた松末小学校などは存続させてこそ、震災被害の教訓を語り継ぐ遺構になります。維持に費用がかかるというなら、多くの公務員給与をゼロ金利、ゼロインフレで失速している民間と同じレベルに下げれば可能だと政治的な判断が求められます。

杷木中学校に援軍に来ておられた南陵中学校の下村洋介先生は管理がすすんでいる学校教育について疑問を感じておられました。「現場の教師の体験、情熱、動機は顧みられず、組織の歯車のひとつとして上からのカリキュラムをこなすのが精いっぱいになってしまった」と語っておられました。ボランティア受付、割り振り、避難所管理と同じ病巣ががん細胞のように広がっているようです。もちろん例外はあります。

樋口喜寿江さん(きずえ 76 歳)は避難所で語られました。スギ林の滑落、崩壊、土砂崩れは人災と言われます。地元の物事を深く考える人たちは郷土が手入れをされず、見る度に心が痛む、そんな不安がついに炸裂したことを残念に思っておられます。高度経済成長[1954 年 12 月-1973 年 11 月]に、木材需要が高まり、国は植林を促しました。国は、TPP と同じように木材輸入の自由化、木造住宅の需要低下になることも見通せなかったのです。東峰村の渋谷村長は、森林が下流域の水源地を養い、川から海に栄養を与える機会があることを強調。『植林を推進した国は現状を改善する手だてを示してほしい』と要望しています。『西日本新聞』2017 年 7 月 17 日付。経済を優先したつけを刈り取らねばならない羽目になったと、語られる歴史の証人たちの発題は重みがあります。

今こそ「田・山・湾の復活」を日本人全体が見直す時です。

先天性脊柱側弯症(せきちゅうそくわんしょう)の石川幸夫さん(59 歳)は寒水の借家住まいでした。大分県日田山で幼い時に育った頃を懐かしんでおられました。今回の災害は人災という点では異口同音で言われていました。スギ林の「根ざらい」(下草刈り)もせず、自然をなめてかかっていたからだと言われました。「山を大事にせず、お金儲けに走ったことがもたらしたんだ」と。自分たち子どもの頃は自然に蘇生している野草などをおかずにしていたから自給自足だったし、あくせく働く親、祖父たちの姿も見たことがなかったとおっしゃっています。つまりバヌアツのように働かなくても飢え死にすることは自然との共生です。貪欲さが価値観を変えたと冷静に体育館で語られます。

c. 「田・山・湾の復活」

「田・山・湾の復活」とは夢物語ではなく、先人達が享受していた田園牧歌的なエコロジーの回復を取り戻すことに他なりません。決してむずかしいことはないことに現代人は振り返る必要があります。

人間はバベルの塔の時と同じで、造り主を忘れ、チャリンの前にひざまずくと、「主の怒りは燃え上がり、地は揺れ動く。山々の基は震え、揺らぐ」と(詩編 18:8)。「災い」(ヘブライ語ラア「光を造り、闇を創造し 平和をもたらす、災いを創造する者。わたしが主、これらのことをするものである」(イザヤ 45:7)。「わたしは熱情と怒りの火をもって語る。必ずその日に、イスラエルの地には大地震が起こる」(エゼキエル 38:19)。二元論的に、「災い」はサタンがもたらすと考えてはならない教訓を噛みしめています。

地球を支配するのではなく、世話をするように本来人間は創造されています。飛行機の乗客を世話す

るフライトアテンダントをかつてスチュワーデスと言っていました。地球を世話するスチュワードシップの欠落について考えられます。技術、便利さ、経済の追求の末路の衰れさを思い知らされる断片です。自然の破局について私たち人類が浸食した責任の重さ、痛烈な自覚を求められます。

朝倉で一番被害の範囲が大きかった松末の伊藤睦人さん(72 歳)は松末のコミュニティを復興するべく不眠不休で現場に何度も足を運んでおられます。赤谷地区には大分県日田市夜明(よあけ)から 211 号線で迂回されて赤谷集落の現場に到着されました。被害を行政よりも正確に把握しておられます。かつては農家であって、地域のブランド化を目指してスギから柿に変える過程の中で積極的であったゆえに、被害にあった原因を正直に言うならば、自分の顔につばをはくようなものだと、自嘲気味に話されます。しかし、震災の壊滅的な状況から先祖代々築いてきたそれぞれ集落をなくすことはできないと言われます。平でない水田を耕し、昔から山あいにはへばりついてコメを作ってきたのです。段々畑は傾斜がきつく耕作単位が狭いのです。田んぼのへりに石を積み重ねるといふ根気を伴う先祖伝来の棚田(たなだ)です。大型農耕機械は持ち込めません。手で刈りにくい隅部分を世話して、守り継いで来たのです。そんな棚田の原風景をなくしたくないという伊藤さんの願いはまさに「田・山・湾の復活」です。若者がふるさとに帰って定着するためには何でもする決意が伝わってきました。

伊藤さんと固い握手をして、杷木中をあとにしました。

月曜日から水曜日の朝食にいたるまで、食材には多くの方たちの応援もありました。7月16日(日)午後8時、広島県安芸のサービスエリアで、小島芙美子(東北ボランティア第 21,24,31,35,38 次)さん、深田明美、紙元順子さんたちからタマネギや袋類の野菜提供、献金が神戸国際支縁機構の1号車にありました。再会、差し入れに感激しました。

避難生活している方たちが一番所望されるのは温かい汁物、新鮮な野菜、飲料水です。

ボランティアは年齢、性別、経験の有無に関係ありません。副詞形ヴォルンターテ「自ら進んで」の語源は動詞「volo(ヴォロ)」「欲する」「求める」「願う」の意です。ヴォロの名詞形 voluntas ヴォルンタースには「意思」「自由意思」「意図」「善意」「喜んでする覚悟、熱意」などの意味があります。ラテン語ヴォルンターテから英語 volunteer ボランティアが誕生します。「ボランティア」の源流は聖書が起点です。久保山さんの3人の娘さんだけでなく、寒水で今後の生活がどうなるかわからない江上夢月(むつき 小4)さんも出来上がった温かいニューメンなどを運んできてくださいました。

他者に喜ばれることを自発的に行なう動機が尊く、美しく、積極的です。親御さんも生き生きしておられる姿に、「良い機会を与えてくださって、本当に感謝しています。娘のこんな姿を見てうれしかったです」と。自分たちが人に役立っているという意識の芽生えがボランティア道の心情の発露です。学校の授業ではなく、ハンディキャップでであっても、幼かっても大人と共生できることが喜びです。位置について、よーい、ドンで一斉に始め、一斉に金太郎飴のように作業するものでもありません。自分のしたい時に自発的にすることがボランティアの出発点です。

第2次では、7回×200食しか提供できませんでした。避難所のみなさんと心をひとつにして、機構が前面に出るのではなく、子ども達がよそったり、容器を洗いやすくするためにサランラップをかけてくれたり、後片づけをしてくれました。「仕える」「タコ(他己)の気持ち」で、普段なかなか緊張する校長先生や職員室の教師達となごやかに励ましてもらえる心の交流がありました。やがて入学する杷木中学校、卒業した中学校について、単に成績を良くするだけ学び舎の関係から人間としての触れ合いにつながった貴重な体験でした。被災し、家がなくなり、これからどう生きていくか親御さんの不安を感じ取っている子ども達のはじめて見せた笑顔は忘れられません。「ボランティア道を続けてきて良かった」と阪神・淡路大

震災時幼かった村上裕隆代表や、熊本支部の大島健二郎君は語りました。翌日は、東遊園地(神戸市役所隣)の炊き出しがあります。産み疲れることのない継続する意義について、反芻しながら、運転を交替で帰神します。

以上

村田充八(阪南大学教授)理事が、稚拙な文章をいつもながら迅速に校閲してくださいましたことを感謝申し上げます。